

# 新美南吉「ごんぎつね」研究

永 長 さ と み

「ごんぎつね」で何を教えるか

新美南吉の「ごんぎつね」は、つぐないの行為を死とひきかえにしか認められなかったごんの悲劇を描いている。善意をもちながらも、お互いに心を通わすことのできない哀しさ、もどかしさ、そして、ごんの死によって、はじめて心が通った感動、こういったものが作品を貫いている。

この作品の悲劇は、すべて「心のすれちがい」によって起こった。

「……畑へはいつてもほりちらしたり、なたねがらのほしてあるのに火をつけたり、ひやくしようやのうらてにふるしてあるとんがらしをむしりとっていったり……。」という数々のいたずらは、ごんにとっては悪意など全くない、ただ孤独をまぎらわせ、心のつながりを求めるための行為だった。しかし、封建時代という背景は、そんないたずらを許しはしなかった。狭い土地で、貧しい生活

を強いられている兵十たち農民にとって、ごんのいたずらは実害があるため、生死にかかわるといっていいほどの重大なしわざであった。ここに第一のすれちがいがある。

ある日、兵十が取ったうなぎを、いつものいたずら心からごんは逃がしてしまう。その数日後、兵十のおっかあの葬式を見たごんは初めて自分のいたずらを反省する。

兵十のおっかあは、とこについてうなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取って来てしまった。だから、兵十は、おっかあに、うなぎを食べさせることはできなかった。

ここで考えなければならないのは、兵十のおっかあがどこにいていて、うなぎを食べたいと言った、という事実は、作品中どこ

にも書いていない、ということだ。作品を読む限りにおいて、そんな事実があったかどうかは、誰にもわからない。ごんはただ、兵十が魚をとっているのを見ただけなのだ。ところが、ごんは自分のいたずらと、兵十のおつかあの死を、何の疑いもなく結びつけた。無条件の反省である。ここに、ごんの純粋な良心がみられる。ごんのいたずらが、悪気から起こったものであったならば、このような反省は生まれてこない。ごんの数々のいたずらは、やはりごんのみみしきによるものであったのだ。村人との交流を求めるごんの孤独な心が、いたずらという形をとって表れていたのだ。村人から憎まれ、疎まれているごんは、実は心のやさしい、純真なきつねであった。

ごんは自分のいたずらを悔い、兵十にすまないと考えた。だが、そんなごんの気持ちを兵十が知るはずはなかった。兵十にとって、ごんは、今まで以上に憎らしいきつねでしかなかったのである。ここに第二のすれちがいをみる事ができる。

ごんはうなぎのつぐないに、いわし屋の目を盗んで、数匹のいわしを兵十の家に投げ込む。ごんは「まず一ついいことをした」つもりなのである。

母親に死なれて一人ぼっちになってしまった兵十に対して、ごんは今までにない親近感を抱いた。ひとりぼっちの自分と、ひとりぼっちの兵十。「おれと同じ」という同胞意識がうまれたのである。うなぎを逃がしたことへの後悔と、兵十に対する同胞意識。こうい

ったものが、ごんをつぐないの行為へと進めていった。

しかし、皮肉にも、ごんの、まず一つめ、のつぐないは成功しなかった。兵十はうなぎ屋にぬすつと思われ、ひどいめにあわされてしまったのだ。ごんのつぐないは、かえって兵十を傷つけることになってしまった。ごんの気持ちは兵十に届かなかったのである。

それでもごんは毎日毎日、届け物を続けた。山でひろったくり、まつたけなどを、くる日もくる日も、兵十に届けたのである。これらのつぐないは、うなぎを逃がした罪の意識から始まった行為ではあったが、ごんの内面には変化が起こっていた。つぐないの相手である兵十に対しては、しだいに親近感を増し、ごんは一方的な友情さえも抱いていたにちがいない。くりばかりではつまらないだろうと、まつたけを届けるごんの心づかいは、単なるつぐない以上のものを感じさせるのである。

一方、兵十の方はどうだったろうか。ごんがつぐないの行為を通して、兵十への親近感と友情を深めていくのに対し、兵十はごんへの憎しみを持ち続けたままであった。ごんの気持ちは知るすべもなく、兵十にとって、ごんは最後まで「うなぎをぬすみやがった、あのごんきつねめ。」でしかなかったのだ。

こうして第一、第二のすれちがいに始まった、兵十とごんの心のズレは、作品の悲劇に向かってますます大きくなっていくのである。

ただ単に、「ごんがかわいそうだ」「ごんを撃ち殺すなんて、兵十はひどいやつだ」という読みとりでは、この作品は教材として生きてこない。兵十とごんの「心のすれちがい」を深く理解させたいうえで、最後のごんの死を受けとめられるようにすることを、私は指導の目標としたいと考える。

さらに、「ごんも兵十もけんめいに生きていた。ごんはひたすら心の交流を求め、兵十は孤独と貧しさに耐えていた。心のつながりを求めるごんにも、求められる兵十にも、この悲劇の原因はない。すべての心のすれちがいであり、これはそのまま、私たちの人間社会にもあてはまるのだ」というところまで発展させていきたい。

### 「ごんぎつね」を子どもがどう読んだか。

ここでは、子どもの書いた感想文(初発の感想 学習後の感想)を通して「子どもがどう読んだか」を考えていくことにする。(なお、感想文というところ、抵抗を感じる児童が多いので、「兵十から死んだごんへ」又は「死んだごんから兵十へ」という手紙形式をとることにした。

では、その手紙の中から、子どものとらえ方がよく表れている部分をとりあげて、考察を加えていくことにする。

まず、N男はこう書いている。

### 初発の感想(ごんから兵十へ)

それからぼくは、こっそりおいていってそんをしたような気もするよ。だってこっそりおいていかなければ、ころされないよ。うだもの。

初発の感想として、当然出てくるであろう感想である。

N男は、ごんが自分の死を「損」と受けとめている。なぜ損なのか。それは、兵十にくりやまつたけを屈けてやっていたのに、そんな良い行いをしていたのに、殺されてしまったからだ。

児童は作品を読み進めていくとき、しだいにごんに近くなっていく。そして、最後にごんが殺される場面になると、児童もごんといっしょに倒れるのである。殺されたごんに同情する気持ちが生まれるのは、児童として当然だといえる。

しかし、もう一步、読みを深めていけば、兵十がごんを憎む気持ちが理解でき、ごんが兵十に殺されたことを、うらみに思っていないことがわかるはずなのである。

一方的に兵十を責めるのではなく、兵十の事情も充分わかったうえで、ごんの死を受け入れるようになるのである。

学習後の感想では、次のように書いている。

### △ごんから兵十へ

ぼくは、そのうちに兵十さんを好きになりましたが、やっとさ  
いごに心がつうじあえて、ぼくはまんぞくにしました。

これは、N男が学習により、最後にごんがうなずいた意味を把握  
したことの表れである。ごんが、兵十と理解し合うことができたゆ  
えに、死さえも満足して受け入れたという読みとりができてい  
るがわかる。

初発の感想で、殺されたことを、「そんなをしたみたいだ」と書い  
ているのは、「死とひきかえてもいらいの、兵十との心のつな  
がり」というものを、どれほどごんが欲していたかを、まだ理解し  
ていないせいであつたのだ。

次に、K男はこう書いている。

初発の感想へごんから兵十へ

てっぼうでうたれたときは、いたかったです。

うなぎをとってすみません。兵十さんが死んだら会えますね。

そして、ひどいめにあわしてすみません。でも、くりとかまつ

たけとかをあげたから、ゆるしてくれ。

学習後の感想へごんから兵十へ

兵十さん、お元気ですか。ぼくも天国でしあわせにくらしてい

ます。でも、あのとき、火なわじゅうでうたれたときは、すご  
くいたかったし、うれしかった。

あんないたずらをしたから、地獄に行くと思つたけれど、兵十  
さんにくりとかまつたけとかをやつたので、天国に行けたと思  
います。

初発の感想からは、通り一遍の謝罪のことはしか見られない。  
「うなぎをとってすみません。」「ひどいめにあわしてすみません。」  
というのがそれである。

さらに、そう謝罪している一方で、「でも、くりとかまつたまつ  
たけとかあげたんだから、ゆるしてくれ。」と、かなり大きな態度  
をとっている。これは、K男が「ごんぎつね」の物語の、表面の部  
分を読み取っているだけであることを表している。作品を貫く、兵  
十とごんの悲劇性を把握するには、至っていないのである。ごんの  
立場に立つて、兵十に手紙を書いているようであるが、K男の認識  
するごんの立場というのは、「すみません」という軽い謝罪ですむ  
いたずらをしたものなのだ。また、ごんの死というものに対し、何  
ら言及していないのも、読み取りの浅さを証明するものである。  
それに比べ、学習を終えた後の感想文では、はるかに深い読みと  
りができているのがわかる。

火なわじゅうでうたれたときは、すごくいたかったし、うれし

かった。

という部分にも、K男がよりごんに接近しているのが表れている。初発の感想では、単に「いたかった」としか、書かれていないのである。K男は、兵十を慕い、兵十との心のふれあいを求め続けたごんの立場に立つことができたのだ。ごんと共にいたずらをし、ごんと共にくりを届けたK男の心が、「うれしかった」という言葉を生んだのである。

K男は、ごんがうたれたことを、悲劇とは受けとっていない。兵十にわかってもらえたということで、死はそれほど大きな意味をもたなくなっただ。

また、学習後の感想の終わりの部分に

あんないたずらをしたから、じごくに行くと思っただけれど、兵十さんにくりとかまつたけとかをやったので、天国に行けたと思います。

と書かれている。ごんの、いたずらに対する認識の程度が、大きく変わったのである。封建社会の百姓にとって、ごんの、いたずらは生死にかかわるほどの、重大なしわざであったのだが、K男はそれを充分理解したうえで、「地獄に行く」という表現をしたのだ。初発の感想にあるように、「すみません。」で済むいたずらではないことを、はっきり悟ったのである。

また、報われずに死んだごんに対して、「天国に行けた」という

形で満足を与えているのも、この感想文の特徴である。

私が示した教材解釈では、「ごんは、兵十にわかってもらえたことで満足し、喜びを感じつつ死ぬ」というものであるが、K男は、これに「天国でしあわせにくらす」という報酬をつけ加えたのだ。これは、K男がごんの結末を、悲劇というより、むしろ、「ごんは天国でしあわせにくらしました。」で終わる、ハッピーエンドとして受け入れていることを表している。

最後に、I子の感想文について、考えてみる。

初発の感想「兵十から天国のごんへ」

ゴンありがとう。わしにくりやまつたけをくれて、ゴンすまなかつた。せつかくびんぼうのわしに食べものをくれたのにうたりなんかして。ゆるしてくれゴン。  
おまえは、ほんとはやさしいんだな。

その前はいたずらだったのにな。

ごんや 帰ってきておくれ、ごんや。

さようなら

学習後の感想「兵十から天国のごんへ」

おれはお前が家へ入って、いたずらをするんだと思って、ついお前を火なわじゅうでうってしまった。すまなかつたな、ごん。

今では、ほんとのほんとに一人ぼっちになっちゃったよ。お前も一人で森の中でずんできて、きみしくなかったかい。今ではお前の気持ちがすぐくわかるよ。天国から帰ってきておくれ。

初発の感想も、学習後の感想も、ごんに「天国から帰ってきておくれ。」と呼びかける言葉で結ばれている。しかし、その言葉のもつ重さ、深さに、大きなへだたりがある。

初発の感想では、くりをもらったことの御礼と、殺してしまったことへの謝罪といった、ありきたりの言葉が、ほとんどを占めている。I子は、まだ兵十になりきれしていないのだ。自分にくりを届けられていた、そのごんを殺してしまった、という兵十の苦惱を共にするまでには至っていない。

そういう読み取りの浅さが、最後の「ごんや、さようなら」を書かせたのだといえる。ごんに、「帰ってきておくれ」と呼びかけたそのすぐ後に、「さようなら」という別れの言葉を書いている。この「さようなら」は、手紙文のしめくり、又はあいさつとしての言葉なのかもしれない。だがI子は、あいさつとはいえず、「さようなら」と別れを言えるくらい、心がごんから離れていたのだ。

学習後の感想では、「さようなら」は書かれていない。別れのことは言いたくないのだ。それほどごんを想い、ごんに天国から帰ってきてほしいという気持ちになっているのがわかる。

兵十の強い後悔、深い苦惱を、I子は読み取ることができた。そして、「天国から帰ってきておくれ。」の一文が、初発の感想にあるのとは、比べものにならないくらい、心の底からの言葉として、書かれたのである。

また、学習後の感想として

今まで、ほんとのほんとに一人になっちゃったよ。

という言葉がある。

兵十は、おっかあが死んだ時点で、もう一人ぼっちだった。その後、ごんが届け物をしている間も、兵十はそれを知らないでいた。だから、その時も兵十は一人ぼっちだと思っていたのである。

しかし、ごんを撃ち、ごんが兵十にうなずいてみせた時、兵十は一人でないと感じたのだ。かつて、ごんが兵十に対して抱いたと同じ親近感、同胞意識、そして友情さえも、一瞬にして兵十は抱いたのだ。しかし、ごんは死んでしまう。兵十は再び一人ぼっちになっ

てしまった。

こうした経過を充分理解し、自分の中にかみしめたため、I子は「ほんとのほんとに」という表現ができたのである。I子が、ごんを友人として、心の通じあえる者として認識したからこそ、兵十は「ほんとのほんとに一人」になったのだ。

以上、三人の児童の感想文を検討してみても児童の「ごんぎつね」のとらえ方がよくわかってきたように思う。「ごんぎつね」の作品の悲劇性が、単に「ごんはかわいそうだ」で終わってしまつては、児童に何らの感銘も与えることができない。

一匹の孤独なきつねが、心の交流を求め続け、ついに自分の命とひきかえに、一人の人間と心がふれあえた喜びを理解し、死をも喜んで受け入れたごんの気持ちを感じやうことで、この作品は児童にとって名作となるのである。

### 教育書の中の「ごんぎつね」

現在（昭和五十七年度）小学校教科書では、教育出版の、五つの出版社すべてが四年生の国語教材として「ごんぎつね」を採用している。しかし、各教科書で文章、さし絵に大きな違いがみられるのである。その中で、特に大きく作品の印象に影響を与えるものに、「子ぎつね」と「小ぎつね」の違いがある。

四社がすべて「ごん」を「小ぎつね」と表記しているのに対し、日本書籍だけが「子ぎつね」と表記している。

「小ぎつね」とは、単に身体が小さいきつねを表し、子供のきつねではない。ある程度の思慮分別をもった小さいきつねを意味し、ここでは、青年期にある小ぎつねを想定するのが、最も妥当であらう

うと思われる。ある程度、善悪の判断もでき、思慮分別をもったきつねであったからこそ、ごんのいたずらは村人の目に許すことのできない行為として映り、兵十がごんを憎む気持ちにも、納得がいくのである。

しかし、「子ぎつね」であるとすれば、作品のもつイメージは一変してしまふ。ごんは子供であるから、いたずらをするのも無理のないことであり、兵十の憎しみにも、たかが子供のいたずらに、そんなに本気で怒らなくてもいいのに」という受け取り方をしてしまふ。ごんが子供であれば、つぐないの行為は、子供なのに、えらいなあ」という感心事になつてしまひ、そんなごんを撃つてしまつた兵十には、何ら弁解の余地も与えられない。読む者はただごんに同情し、兵十を非難することになつて、作品の意図している「心の通じ合わない悲しさ」を読み取ることはできなくなるのである。

また、ごんが兵十に抱く親近感、友情も、子供から大人に向かつてのものとなり、ひとりぼっちの大人同士という、対等な関係から生まれた感情とはいえなくなつてしまふ。「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」という、ごんのつぶやきからもわかるように、ごんは自分と同じ立場にある兵十に、親近感を抱いたのである。ごんは「子ぎつね」ではなく、「小ぎつね」であるべきである。

では、さし絵の違いはどうであらうか。

さし絵から受ける印象は、人により多少違いはあるだろうが、学

校図書のごんは、「小ぎつね」というより、むしろ「子ぎつねに」近い様子をしている。それに比べて日本書籍のごんは、いたずらなどしそうでない、まじめな青年ぎつねを思わせる表情である。日本書籍の教科書の文章が、「子ぎつね」となっていたことと考え合わせる、このさし絵は少し不似合いな気がする。

光村図書のさし絵は、他四社とは異色で、きり絵を思わせるさし絵である。いたずら好きの小ぎつね、という感じはよく出ているが、直線的な図案のためか、何となくぎくしゃくとして、暖かみの少ないごんになっていると思う。

東京書籍、教育出版のごんは、とてもよく似た様子に描かれている。ぼんやりとぼかしたその描き方は、「ごんぎつね」の作品の時代背景にびったり適していると思う。

兵十についても、教科書により大きな違いがみられる。

五社の中で、最も目をひくのは、日本書籍の兵十である。さし絵をみると、日本書籍の兵十は非常に若くなっている。貧しく、封建制度の中で細々と暮らしている。純朴な正直者、という、作品の中のイメージとはほど遠い。この兵十はあまりに若く、力にあふれすぎている気がするのである。

光村図書の兵十は、日本書籍とは逆に、非常に老いた様子をしている。絵からは、髪が白くなっているようにも思える。この兵十くらしい年齢ならば、母親もかなりの老齡であろうから、死んだこと

もそれほど悲嘆すべきことではなくなるのではないか。

学校図書、東京書籍、教育出版の兵十は、だいたい同じイメージに描かれている。特に若くもなく、老人でもなく、生活の貧しさを感じさせる様子で、一方、純朴な正直者というイメージもある。私はこれら三社の兵十が、作品のめざす兵十であろうと思う。

文章はもちろん、さし絵というものも、作品を強く印象づける要素の一つである。特に小学校の段階では、さし絵の助けを借りて読み進むということも少なくないと思われるので、さし絵の掲載ということに対して、もう少し注意が払われるべきである。

(奈良県北葛城郡真美ヶ丘東小学校教諭)